

## 研究成果

湯舟英一 [yubune@toyo.jp](mailto:yubune@toyo.jp)

総合情報学部教授、イギリス・コベントリー大学交換研究員、イギリス滞在期間 2022/9/29  
～2023/9/28

当初予定していたコベントリー大学人文学部の教員との共同研究が先方の都合でキャンセルされたため、コベントリー大学の学生が参加する聞き取り調査や認知心理学実験、開発教材利用による学習効果測定は行わなかった。

その代替として、私が予てより行ってきた、カタカナ援用による発音・リスニング YouTube 動画教材の量的質的向上の取り組み、音読の学習効果に関する基礎研究、それらの TOEIC e ラーニング教材開発への応用研究、英語歌を利用した発音向上のための方法論研究、などを行い、その成果は出版、論文投稿、YouTube 動画の制作、自身が出演する YouTube 動画講義の制作、大手英語コーチングサイト Flamingo とのコラボによるウェビナー（ウェブ上のセミナー）という形で発表した。また、11月25日（土）には、早稲田大学田辺英語教育研究会において、「イギリスの最近の教育、移民、文化に関する報告」として招待講演を予定している。

本研究成果報告書では、私が交換研究員として過ごした1年間に行った、上記の自身単独あるいは日本在住の共同研究者らとの共同プロジェクトの成果について報告したい。

**1** . 湯舟英一（2023年12月発行予定）「TOEIC®公式 e ラーニング基礎編 L & R の開発と学習効果—TOEIC 対策としての音読訓練の意義—」 Development and Learning Effects of TOEIC® Official e-Learning Foundation Course Listening & Reading: Why Reading Aloud Training for TOEIC? 『外国語教育メディア学会関東支部研究紀要』(8) .

本稿では、筆者が開発に携わり IIBC が発売した「TOEIC®公式 e-Learning Foundation Course Listening & Reading」の概要と理論的背景を紹介するとともに、大学の講座に導入した場合の学習効果について報告した。教材は米国のテスト開発機関 ETS (Educational Testing Service) が作成した本格的な問題を出題する Web アプリケーションである。基礎学習スキルをアニメーションや動画講義で紹介した後、TOEIC L&R の各 Part に役立つ基礎スキルをトレーニングできる。具体的には、TOEIC L&R の各問題の SCRIPT を用いた「チャンクイメージング」と「チャンク音読」により、音や文字からイメージとして意味を直接瞬時に理解することで、ボトムアップの聴解力と速読力を身につけることができる。

本論文の中心的論考は、TOEIC のようなコミュニケーション・スキルを習得するための反復トレーニングにける「音読」の必要性と訓練方法について、理論的、実践的先行研究に基づき、それらの教育的示唆や成果を、ICT を利用した効果的な e ラーニング教材の開発に応用する上での工夫や問題点を共有し、今後のより良い e ラーニング教材開発研究に寄与することを目的とした。

教材の全体像は図 1 のように 4 つのセクションと付加機能から構成される。教材の全体像や構成の詳細は以下のサイトを参照されたい：

<https://www.iibc-global.org/toEIC/support/el/kiso.html>



図 1 e ラーニング教材の全体構成 (IIBC 提供)

## TOEIC L&R に役立つ 7 つの基礎スキル

本編の学習に入る前に、TOEIC L&R に役立つ 7 つの基礎スキルの紹介と説明がある。これらは 1 つが 3 分程度にまとめられたアニメーション動画となっている。具体的には図 2 のような構成になっている。まず、英語コミュニケーションを行う上での一般的共通知識として、図 2 の最下層の 3 つの項目を学習する。具体的には、「語彙の知識」として、単語やコロケーションなど、いわゆる語彙表現がコミュニケーションのための言語材料として如何に機能しているかを学習する。次に、「文法の理解」として、主に文中では適切な語形や品詞を選定する必要があることと英語特有の語順を理解する。そして、「言葉の機能の理解」として、言葉は文の命題的意味だけでなく推論による語用論的機能を持ち得ることを具体例を通して理解する。



図 2 7 つの基礎スキルの概念図

続いて、それらの基礎言語知識を土台にして、TOEIC L&Rの問題を解く上で必須となる 4 つのスキルを学習する。とりわけ、Part 3 会話問題、Part 4 説明文問題、Part 7 読解問題では、一つのまとまった会話や話の後に 3 問以上の問いが続くことが多いが、それら

の問題を解く際に役立つスキルがこれら4つである。まず、「概要を把握する力」は会話やトーク、文書の中で、話し手や書き手の目的・意図を捉える際に重要なスキルである。TOEIC L&Rの会話問題では、話の目的以外にも登場人物がいる場所や職業を尋ねられることもある。読解で言うスキミング（すくい読み）と同じである。次の「詳細・事実を理解する力」は会話や文書内の特定の情報を素早く認識するスキルであり、とくに読解においてはスキニング（検索読み）と呼ばれることもある。このスキルも、TOEIC L&Rの問題の詳細や事実関係を尋ねる問題では非常に役立つ。「情報を関連付ける力」はテキスト内の個別の情報を2つ以上合わせることで事実を特定したり文脈を捉えたりする力のことである。会話や文書などから特定の情報を有機的に組み合わせて理解することを、リスニングやリーディングを実行しながら行うには相当の認知的負荷が強いられることになるため、ボトムアップ音声理解スキルや音韻符号化などの基礎スキルが一部自動化されていることが必要である。最後の「情報を推測する力」は、表層的言語情報（命題的意味）から言外の語用論的意味や、話者や筆者のコミュニケーションにおける意図を掴むスキルである。

## ゼロから英語を聞く・読む

このセクションは、TOEIC L&R に特化したものでなく、TOEIC L&R スコア 500 点以下の英語初中級者が英語を聞いて、読んで理解する際にぜひ知っておきたい基礎知識を筆者による動画説明を通して理解してもらうことを目的としている。図3は全体構成を示す。



図3 ゼロから英語を聞く・読むの構成 (IIBC提供)

まず、「はじめに」として、英語を聞き取れない大きな原因として、英語のチャンク表現に慣れていないこと、すなわち、

- 1) 頻繁に使われる語彙表現を知らないこと
- 2) チャンク表現を流暢な英語音として記憶していないこと

を具体例を挙げて説明し、これらを克服するために、チャンク単位の表現の教師音声を真似てリピートすることで、英語リスニングの基礎スキルを習得することを目的としている。

次に、英語を速く読めないことを克服するために、次の 4 つの実践を心掛けることの重要性を説明している。すなわち、

- 1) チャンク単位で
- 2) 返り読みせずに
- 3) 和訳せずに
- 4) 意味を即座にイメージすること

を具体例を挙げながら動画で説明するとともに、教師音声を真似た音読を繰り返すことで音韻符号化を高速化し、マクロな読解スピードを向上させることを目的としている。

「はじめに」に引き続き、「ゼロからリスニング」と「ゼロからリーディング」が配置されているが、学習の順序は決まっておらず、どちらからでも学習を始められる設定になっている。まず、「ゼロから聞くレッスン」では、英語をチャンク単位で聞いて、表層的言語情報のままではなく、イメージに置き換えて順次記憶してゆく方法を学んでゆくのだが、とりわけ、チャンク表現に含まれる音声変化の種類別に 5 つの説明動画が用意されている。ここでは、子音や母音などの音素や子音結合などの聞き取りではなく、流暢発話のチャンク内で実現される「短縮形」「脱落」「連結」「同化」「弱化」の 5 つの音声変化を扱っている。

一方、「ゼロからリーディング」では、「チャンクで読むレッスン」と題して、学習者が英語センテンスを読む際に、スピードが遅くなると想定される英文構造や文法項目 7 つを取り上げて、チャンク単位で返り読みをせずにスピードを担保しながら読むために必要なノウハウをアニメーションと筆者による講義動画形式で学習する。具体的には、ビジネス文書にありがちな長い主語の切れ目を素早く探したり、不定詞、分詞、従属接続詞などの後置修飾によって日本語と語順の流れが逆になる表現を返り読みしないで理解する方法や、Due to など文の前半に置かれる句表現のイメージを保ったまま、続く主文を理解していくノウハウを解説している。いずれも、すでに理解した内容を記憶保持したまま、次のチャンクを処理、記憶していくという英文読解のミクロな基礎スキルを、後に控えるリーディング・トレーニングで手続き記憶として身につけるための準備を行う役目を持っている。

## リスニング・トレーニングとリーディング・トレーニング

このセクションから、実際の問題形式に沿って、トレーニング付きの例題と問題演習に取り組んでもらう。トレーニングの流れは以下のようにになっている。大きくリスニングとリーディングセクションに別れており、どちらから先に学習しても構わない。

リスニング・トレーニングでは、TOEIC L&R の問題形式の Part 1 から Part 4 までの音声を活用し、5 種類の音声変化が実現された 2 秒前後のチャンク音声を聞いて、音からダイレクトに意味を画像化するトレーニングを行った後、できるだけスクリプトを見ないで

チャンクの教師音声を真似て繰り返すトレーニングを行う。なお、チャンク音声の音読の前には、ディクテーションのトレーニングに挑戦させるが、そこでも 5 種類の音声変化が生じている箇所を空所にしており、短縮形や連結、脱落といった音声の聞き取りを集中して行ってもらえるように仕組んでおり、音声に対する **Focus on Form** を実現している。

(He's) (pouring) water into a cup.

なお、Part 1 写真描写問題と Part 2 応答問題では、正解となる選択肢のみをトレーニングの対象としている。

リーディングにおいても、基本的には上記のリスニングと同様、チャンク単位での理解を進めることで、速読の実現を目指している。問題演習を使った最初のトレーニングでは、トレーニング用に収録された読み上げ音声の本教材のために実装されており、通して聞くことで自然な読解スピードを実感できる。次に、音声化したときに 2 秒程度になるようにチャンクキングされた英文が順次提示され、できるだけ速く意味をイメージ化するトレーニングを行う。その後、リスニングと同様、教師音声を真似るように反復音読を行い音韻符号化の高速化を目指す。最後に、教師音声のスピードと同等の制限時間内に読めるか確認するために、同じ読解テキストをもう一度読んでみる。その際、画面上ではタイマーで学習者自身の読解時間を確認することができる。上述のトレーニングを適切に行った結果、読解スピードが速くなったと実感できれば、自信とモチベーションを得ることができる。

この教材を実際の東洋大学総合情報学部の選択必須の英語授業に導入した結果、3 か月間毎週クラスでトレーニングを受けた後、履修者の TOEIC L&R の平均スコアは 399.74 から 466.12 に上昇した。さらに、平均読書速度の測定値は 72.95 wpm から 93.55 wpm に増加した（どちらも統計的に有意）。最後のセクションでは、参加者のアンケート回答の結果について説明し、本 e ラーニングによる学習について肯定的な意見が大半を占めた。このことは、本教材の中心である音読と速読の反復トレーニングと教材としての動機付けの仕掛けが履修者にとって効果的であったことの一つの証左と言える。しかしながら、本 e ラーニング教材がリリースされて間もないこともあり、さらに多くの利用者からのフィードバックを得ながら、問題構成や内容について更なる検討を行う必要がある。

## 2. 新出一也著、湯舟英一監修 (2023) 『洋楽を歌うだけで英語の発音が劇的によくなる Nipponenglish』 ナツメ社、2023 年 4 月 4 日発行 ISBN 978-4816373442

ネイティブ教師音声の学習者による反復音読時のカタカナ援用の方法論の研究について過去 7 年前後の取り組みの成果を出版という形で発表した。2 秒程度のチャンクの母語話者音声を模倣して音読する際に、複数の音声変化が重なったり繋がることで、初級者には文字からは想像できない崩れた発音になることもしばしばある。そのような音声を自分の耳と口の感覚だけを頼りに模倣音読すべく個別学習するのは困難である。そこで筆者は近年、英語のリズムに則った流暢発音へ誘導できるカタカナ表記 Nipponenglish の開発と運用を試み

ている。すでに YouTube 上で英語音声変化別の訓練動画や、人気の洋楽を流暢に歌いやすいようにカナを振った動画を随時公開したり (<https://nipponenglish.com/>)、第一興商カラオケ DAM の英語歌詞のテロップとしてカタカナを提供してきた。カタカナは r と l など日本語にない子音や母音を表記し分けるには向いていないが、let it go レリゴー、let you know レッチューノ、bad day バッデイ、など音声変化が実現された後の流暢発音を表記するのに親和性が高いことが分かった。今後も教師音声模倣反復音読の際の補助機能として、YouTube やカラオケ等のプラットフォーム上で、音再現性や視認性等の改良を重ねていきたいと考えている。

カラオケは歌に合わせてテロップ (字幕) の色が変わっていく (ワイプする) ことで、歌の英語リズムを視覚的に認識できる利点がある。これは、パラレルリーディングによる音読練習を、カラオケというマルチメディアツールで支援していると見ることもできる。従来の英語カラオケに振られているルビは、各単語の上に文字通りのカタカナ英語である。例えば、Let it go には「レット イット ゴー」と振られている。上手に歌うためにリズムが重要なカラオケでは、従来の振り方では音楽の尺に収まらず、また元歌の音声実現とも全く異なるものとなる。我々の開発したカタカナ・システムでは、「レリゴー」のような実際の音声実現に近づけ、かつ音楽の時間的尺に収まって歌唱できるようにカタカナのルビを工夫した。その際、3つのトレードオフと考えられる要素、「視認性」「音再現性」「親和性」の折り合いを着けることが最大の難関であった。以下、各要素での開発面の工夫について論じる。

## 1. 視認性

カラオケでは、曲に合わせてテロップがワイプ (色変わり) する。速い歌い回しの曲やラップでは、歌のリズムに合わせて表示時間内に読める文字数でなければならない。さらに、強く長く歌われる音節は一目でそのように視認される必要がある。これらの点に関して、我々は、歌手の発音をできるだけ再現しつつ、カナルビ文字数を最小限に抑える工夫を行った。また、プロソディー面において、強く歌われる音節の文字を一回り大きくし、長く強調される音節はできる限り長音記号「ー」を利用し視認性を高めた。以下は具体例である：



## 2. 音再現性

カタカナは r/l, b/v, th など単語内の精密な発音表記には向いていないが、音声変化後のチャンク発音を表記するのに向いている。以下の例では高い音像再現性を実現できる：Check it out 「チェキラウ」のような音連結および /t/ の弾音化 let you go 「レッチューゴー」のような融合同化 bad day 「バッデイ」のような無開放破裂音 これらの音声変化を含むチャンク発音において、従来のカタカナ・ルビでは音節が増えてしまうが (図 2)、音声変化をカナで表現することで英語本来の音節数とリズムを体感できる (図 3)。

### 3. 親和性

ここで言う親和性とは、日本人にとって馴染みがある、あるいは見覚えのあるカナの並びかどうか、馴染みのない記号などを使っていないか、ということに関係する。Nipponglisch システムは「カタカナしか使用していない」。これは当然のことのようだが、実は容易なことではない。事実、過去のカタカナによる英語表記の試みの多くで、日本語にない音素の表記に、平仮名、英字、記号などが利用されてきたが、それらに慣れるには学習が必要であり、唐突感は否めない。また、見覚えのないカナの並びを見ると我々は「読む」ことを始めるが、見覚えのあるカナの並びは「見る」だけで認識できる。この差は非常に大きい。例えば、以下の例では、徐々に親和性が増し、3. では「見る」認識レベルで一定の音再現性を担保した音韻符号化ができると考えられる：

- This is all I need.
- △ 1.     **ディスイゾーライニー**
  - 2.     **ディスイズ オール アイ ニー**
  - ◎ 3.     **ディス イズ オーライ ニー**

具体的には、1. は音再現性は一番高いが、カタカナの並びは見覚えのないものであり（親和性が低い）、かつ、カナの連続数が10個であるため視認性も低い。一方、3. は、「ディズ」と「イズ」が離れており、一見音再現性が低そうだが、日本人とりわけ関東人は語尾の「ス」の母音は発音しない、あるいは無声化するため、次の「イズ」と自然に連結し、結果として、2. の「ディスイズ」と同様の音実現が可能である。この音実現に関しては、実験データは取っていないが、著者が複数の人に音読してもらう中で確認されている傾向である。また、all I を「オーライ」と記述しているが、日本語の「オーライ」は all right よりも all I のチャンク発音の方に音像は似ていることが多い。よって、意味は違っても、親和性と音再現性に優れた「オーライ」というカナ4文字を独立させることで、親和性、視認性、音再現性を実現している。さらに、以下の例を見てみたい。日本語の「タ行」と「ダ行」は英語音の t と d と親和性が低い。上記の語尾の「ス」のように、母音が無声化したり脱落した後、後続母音と容易に連結しない。よって、2. のように連結後の音声（ザット イズ → ザリズ；バッド アバウト → バーダバウ）や、融合同化後の音声（アバウト ユー → アバウチュ）のように表記することで、文字数を減らし（視認性向上）かつ同時に音再現性も向上できる。

なお、Nipponglisch はカタカナ・システムではあるが、特定の単語やチャンクの発音に対して、固定された定常的なカナを当てはめるのではなく、歌手の歌い方や個人的発音の特徴や方言などを考慮して、その歌ごとに異なるカナ表記が実現されている。表記に揺れが生じる単語の例として、baby は「ベイビー」「ベイビ」「ベイベ」「ベビ」「ベーイベ」など、原曲のリズム、メロディーや歌手のクセや方言によって様々である。また、音素ごとの例としては、例えば子音では、/th/ はサ行・ザ行を使うことが多く、/v/ は強勢のある音節では「ヴ行」を使い、強勢のない音節では「バ行」を使うことが多く、語頭の/l. r/ は共通して「ラ行」を使うことが多い。母音では、hot, God などの母音は「ア段」か「オ段」、sad, bad な

どの母音は「エ段」か「ア段」を用いるが、いずれになるかは曲ごと、さらに言えば同曲内でも歌い方によって変わる場合もある。

### 3. ETS 著、湯舟英一制作協力 (2022) 『公式 TOEIC Listening & Reading Part 7 速読演習』 一般財団法人国際ビジネスコミュニケーション協会 (IIBC) 2022 年 12 月 6 日発行 ISBN 978-4-906033-69-0

この著作は、アメリカのテスト開発会社で TOEIC テストを開発する ETS (Educational Testing Service) のリーディング問題 Part 7 の公式問題を利用して、英語中級者が英文読解速度を向上するためのヒントや具体的な練習方法を紹介し、大量の練習問題を提供した。私は本書の理論的説明の執筆、練習問題の執筆、および、英文のチャンキングとその和訳の監修を行った。なお、ETS の公式問題を利用した図書はすべて、慣習で著者は ETS と表記され、実際の本の内容の執筆者は制作協力というクレジットになり、私も本書の奥付では、そのようなクレジットとなっている。

以下、私の執筆した箇所からの抜粋を紹介したい。

リーディングという作業は、読んだ内容を記憶したまま、次々と現れる文を頭の中で声を出さずに読み、内容を理解し、さらには文書には書かれていない状況や意図を推測しながら読んでいくことです。この際、頭の中で無意識に文字を音声化しています。この過程で、「記憶」と「処理」を同時に行うことを可能にするのが脳の短期記憶システム「ワーキングメモリ」です。この短期記憶では一度に処理できる容量や時間が限られています。文字を読んだ場合は 2 秒程度の連続音声しか記憶できず、語数で言えば、4～7 語くらいが限度です。よって、「速く読むことがワーキングメモリの負荷を減らし、深い理解と内容記憶を可能にする」のです。英語ネイティブスピーカーの読む速度は一般に 300 語/分 (wpm) 前後とされています。私たち学習者がネイティブスピーカーに近いスピードを目指すにはどうしたら良いのでしょうか。そのヒントをご紹介します。

#### 1) 文字の音声化をスピードアップ

ネイティブ同様、学習者も英文を理解する際は頭の中で (声には出さずに) 文字を音声化しているのです。ただ、学習者はこの音声化のスピードが遅く、一度に音声化する単位も短くなります。よって、英文理解のスピードを上げるには、先ず頭の中で発音するスピードを上げる必要があります。そのためには、音読練習によって文字から音への変換を高速化、自動化したり、一度に音声化する単位を単語から数語のチャンクへと広げることが効果的です。

#### 2) 和訳しないで英語の論理で理解する

和訳という処理をすれば、上述のワーキングメモリに余計な処理負担が掛かり、内容の記憶を阻害します。また和訳は英文と語順が異なるので、次の 3) の「返り読み」につながり、読解スピードの低下を助長します。

### 3) 前から読み進め、振り返りをしない

英語の語順は日本語と違ったり逆なため、日本語的にスッキリ理解するには英文を右往左往する必要があります。特に気を付けたいのが英文構造に多い「後置修飾」です。to 不定詞、関係代名詞、although や because などの従属接続詞、in order to などの前置詞構文は英文の論理のまま新たなチャンク情報を後ろにつけて足していくイメージで読みましょう。

### 4) チャンク単位でイメージする

英語のまま理解するのは良いのですが、言葉のまま記憶すると短期記憶はすぐに一杯になってしまい、理解や推測などの処理に支障をきたします。英文は数語のチャンクをイメージ（頭の中で画像化）することで、ワーキングメモリの容量を経済的に使えて内容を記憶しやすくなります。playing in the park というチャンクなら「公園で遊ぶ様子」を思い浮かべます。慣れてくればチャンクを見た瞬間に、無意識に自動的にイメージできるようになります。

では、次に具体的なトレーニング方法についてご紹介しましょう。

#### 1) スラッシュリーディングとイメージ化

英文を意味の塊（チャンク）ごとに区切り目（スラッシュ）を入れたり、区切りを意識して理解するトレーニングです。その際、チャンクごとに前から後ろへ、塊ごとに内容をイメージしながら読み進めます。スピードを意識しテンポ良く読み進めましょう

スラッシュでの区切り方の基本は、句や節が基本となります。具体的には、長い主語の後ろやカンマの後ろなど、前置詞句、副詞句、to 不定詞、接続詞、関係詞、that 節、がチャンク単位になります。これらはネイティブスピーカーがポーズを入れる切れ目でもあるので、リスニング理解にも役立ちます。以下は初級者がスラッシュを入れた場合の例です。最初のスラッシュは関係詞節、次は前置詞句、最後は接続詞節の前にあります。上級者になれば、This is the ticket you must show は一息で読み、理解できるようになるでしょう。

**This is the ticket / you must show / at the entrance / before you enter.**

#### 2) 虫食いリーディング

未知の単語があっても止まらずに英文を読み進め、一部の詳細が不明でも前後から類推して理解するための練習です。虫食い箇所は多くの場合、名詞、名詞を関係詞で補足している箇所、名詞を修飾する形容詞などです。未知の語句を気にしすぎず、文や段落全体を見て、概要を把握するつもりで読み進めてください。そうすれば、虫食いがあっても理解度確認問題に解答できます。「木を見て森を見ず」ではなく「つねに森を見ながら読む」ということです。読むスピードが遅いと「木」しか見えてきませんので、速く読むことを忘れずに。

#### 3) 日本語先読みリーディング

自分が詳しいトピックや既知の情報について書かれた英文は読みやすく、速く読めることは皆さんも経験で知っていると思います。そこで、「自分は速く読めない」と思い込んでいる方に「日本語先読みトレーニング」をおススメします。このトレーニングでは、先に日本

語訳で内容をざっと頭に入れた後で英文を読むことで、すでに内容がイメージ化されているため、英文理解の精度とスピードが非常に高まります。問題集などで、いつも未知の難しい英文から読み始めて自信を失うことは、「試合」で負け続けるようなもので、スピードだけでなくモチベーションも下がってしまいます。そんな時は、このトレーニング・モードで、英文をスピーディーに読むネイティブ感覚を体得しましょう。直後にその英文の音声も聴いてみるとリスニングも同様にネイティブライクな感覚を体験できて効果は絶大です。

#### 4) 音読トレーニング

上述したように、音読練習によって文字から音への変換を高速化、自動化することがリーディング・スピードの向上に欠かせません。ただし、せっかく音読をしても自己流の発音では効果はあまり期待できません。音読練習の際は、ネイティブの見本音声を「チャンク」ごとに真似てリピートしましょう。チャンク内で起こる脱落、レ結、同化などの英語特有の音声変化やチャンク全体のリズムやイントネーションが身に付き、ネイティブの音声化スピードを体験できます。練習を繰り返すことで、リスニング理解も向上します。

## 4. 中田 ひとみ, 藤本 淳史, 湯舟 英一 (2022) 英語歌の授業活用 —実践例と選曲における調査と提案—『外国語教育メディア学会関東支部研究紀要』(7). 55-70. DOI10.24781/letkj.7.0\_55

外国語としての英語学習用教材として、英語の歌は多くの教育現場で採用されている。歌詞内容も含め、歌の導入は学習者を惹きつけ、学習の動機付けとしての役割も果たす。その効用についても様々な知見や実践の結果が報告されているが、一方で、英語歌の使用は授業の主流を成さない余興的な活動と位置づけられることも多い。本論ではこうした従来のイメージから一步踏み込み、より効率的なタスクの実践例を示した上で、歌の導入が英語に特徴的な音声変化の習得を促進する可能性について検証した。まず始めに、既存の教科書分析の結果に基づく歌唱活動を対面授業およびオンライン授業で実施した際の実践報告を提示し、次に楽曲リズムの特徴に基づいた選曲の調査を行い、最後に今後の歌唱実践および授業で取り上げる選曲へのヒントを示した。

本稿では、まず、英語歌を取り入れた授業実践の先行研究を概観し、英語歌を導入する理論的意義や授業実践の成功例や留意点などを確認することができた。さらに、英語歌を取り入れた既刊教材を網羅的に分析し、扱う4技能の偏りやタスクの種類についての傾向を明らかにした。とりわけ、リスニングや語彙表現の習得などインプット型のタスクが多く、アウトプット型のタスクにつながっていないという問題点を指摘した。次に、これらの基礎調査の上に、対面・非対面型の授業実践の取り組みを紹介した。その中で、語彙表現や文法のインプットに留まらず、歌の断片的な部分の発声を促すアウトプット型授業につなげる試みを紹介して、英語歌が単なるエンタメ的かつ恣意的なタスクで終わらずに実質的に統合的な英語力習得の一環として利用価値が高いことを示唆した。後半は、今の学習者たちが好む英語歌の特徴のうち、曲調の新旧やリズムパターンに関する調査を紹介した。その結果、今のZ世代と呼ばれる学生には、同時代の音楽リズムを好むという傾向は特になく、教員

は学生に合わせて新しい楽曲を殊更選択する必要はないことが示唆された。よって、シラブルに対する音のはめ方が現代風（お洒落）で難易度の高い傾向にある最近の楽曲よりも、リズムと歌詞の対応が認識しやすく、授業でも歌いやすいスタンダード・ナンバーを導入することの意義が改めて認識できたと言える。そのような曲であれば、歌の時代的社会的背景や歌手のトリビアなどを知る教員も多いため、学習者たちに特定の歌への興味を持たせ、動機づけを高めやすくなると思われる。

## 5. 湯舟英一 (2023)「英語学習の方法と発想を変えれば誰でも簡単に英語が話せる」

YouTube Live 英語教育フェス 2023. YN Global Relations 主催. 2023年10月6日。

1:34 (1時間34分) から20分間の動画

<https://vimeo.com/871344046/cc18b86e17?share=copy>

ウェブ上の関連資料

<https://togawaakio.com/11047/>

<https://event.impacthouse.jp/online-fest-from-yukari-naganuma/?ref=E86969075D>

このインターネット上で開催された英語教育フェスでは、20名の講師が4日間にわたって、自身の英語コーチングや書籍の紹介を行い、その後のフォローアップへの道筋を示す講習会であった。

私は、4日目の2番目に、20分の事前収録し編集済みの動画をストリーミングで流し、動画の前後に司会の長沼ゆかり氏が紹介やフォローアップをしてくださった。私の話の概要は、日本人の多くが英語を流暢に話せない原因として、先ずはじめに「年齢の壁」と「言語の親和性の悪さ」を挙げ、その上で、英語が聞き取れないのは、自分で発音できないことに最大の原因があることを認知心理学の知見や先行研究を下敷きに議論した。しかし、言語習得の臨界期を過ぎた日本人の大人にとって、聞いた英語を真似て自分で発音することにすでに大きなハードルがあることから、その補助ツールとして、英語流暢発音をカタカナ表記したものを援用しながら英語をリピートする練習の効果を紹介した。これまでの研究で、カタカナは r や l の弁別など音素単位の弁別表記には向いていないが、let it go レリゴーや、bad day バッデイ、let you go レッチュゴー など、流暢に音がつながり音声変化した後の音声を正確表記できるという利点があり、それらの音は日本語の50音表記と同じ音声実現単位なので、日本人の得意な発音であることを示した。具体的練習方法として、洋楽歌唱や YouTube 上でこれまで制作してきた発音練習動画を紹介しながら、聞き取るためには先ず自分で真似て発音してみることの重要性とその際にカタカナの補助があることで容易にリピート練習ができることを示した。このフェスの反響は大きく、その後10月28日(土)の20:00からウェビナーを開催した所、20名程の参加者があり、10月6日のフェスの内容や YouTube 動画の教材を使った勉強法について関連な質問や意見を得ることができ、今後の更なる開発研究にとって有意義な会となった。

## 6.

湯舟英一 (2023) Nipponglisch で Aladdin を歌おう Flamingo Webinar. 2023 年 8 月 17 日.

湯舟英一 (2023) Nipponglisch で Part of Your World を歌おう Flamingo Webinar. 2023 年 6 月 30 日.

上記、2 回にわたり、ディズニーの人気曲を取り上げて、英語発音や上手な歌い方などについて、それぞれの作品の背景やストーリー、ミュージカル化、実写化などの情報も交えながら各 1 時間のウェビナーを行った。資料はパワーポイントスライドとして残っているので、必要であれば、すぐにお送りいたします。

## 7. Nipponglisch Webinar

上述の Youtube Live 英語教育フェス 2023 の参加者および、nipponglisch YouTube 動画のチャンネル登録者数 9.47 万人 (11 月 1 日現在) から 20 名が参加し、英語発音や英語学習全般について様々な質問に答える形でウェビナーを開催した。参加者からも好評で、今後定期的にシリーズ化して欲しいとの要望もあった。

## 8. 外国語教育メディア学会 LET メールマガジン 2023 年 5 月号への寄稿

以下の記事「最近の国音楽事情」というタイトルで、イギリスのコベントリー現地での生活で印象的なこと、および今のイギリスの音楽事情の一端についての招待記事を外国語教育メディア学会の全国版メールマガジン (月刊) に寄稿した。詳細は以下の URL から。

<https://j-let.org/~wordpress/index.php?itemid=1817#more>

## 9. 講演予定 (招待)

2023 年 11 月 25 日 (土) に、早稲田大学田辺英語教育研究会において、「イギリスの最近のフォニックス教育、言語事情、および文化一般に関する報告」として招待講演を予定している。場所は早稲田大学西早稲田キャンパス 3 号館